

記念講演

長崎居留地と西洋医学の発展

ブライアン・バークガフニ (Brian Burke-Gaffney)

長崎総合科学大学 人間環境学部 環境文化学科

長崎は、南蛮時代、鎖国時代、そして明治・大正時代において常に世界に開かれた港町でした。さまざまな情報や技術がこのゲートウェイを通じて日本に入り、長崎に独特な和衷文化をもたらしました。その中で、医学は特に重要な意味合いを持ち、異文化の壁を越える「共通目的」として日本人と外国人を結びつけたのであります。

江戸時代におけるケンペルやシーボルトなど「出島蘭館医」の医療・教育活動はよく知られていますが、幕末・明治期の長崎外国人居留地と西洋医学の関係はあまり注目されていないのが現状です。

安政 5(1858)年に締結した安政条約により、日本は通商を目的として国の数港を開港し、在留外国人がヨーロッパでの生活様式をそのまま維持できる居留地の建設を認めることとなりました。長崎の外国人居留地では、洋風建物が建てられ、ホテル、銀行から洋服店、また美容院、葬儀店に至るまで、その設備は至れり尽せりでした。西洋式産業、経済、法制、食文化、スポーツや娯楽など、様々な西洋文化が居留地経由で日本に影響を及ぼしていきました。明治 32(1899)年 7 月に、外国人居留地は廃止されたが、その後も在住外国人を中心に独特の社会的な生活基盤や西洋風の建築様式を残しました。

居留地時代においては、チャールズ・アミアト (Charles E. Amuat、スイス人)、チャールズ・アーノルド (Charles Arnold、英国人)、ロバート・ボウイ (Robert Bowie、アメリカ人)を始めとする外国人医師が居留地住民の医療に携わるかたわら、長崎医学校の講師を務めるなど、医学交流を通じて日本の近代化に貢献しました。また、「メディカル・ホール」(Medical Hall)と呼ばれる薬局が明治初期に大浦地区で開業し、輸入薬剤や日用品を居留地住民に提供し、日本初の清涼飲料水生産も手がけました。

講演では、長崎居留地と西洋医学の発展の関係、また当時としてまれだった国際的かつ平和な協力体制が長崎にできた要因についてお話したいと思います。